

京まち工房



WINTER
情報交流誌

no.

49

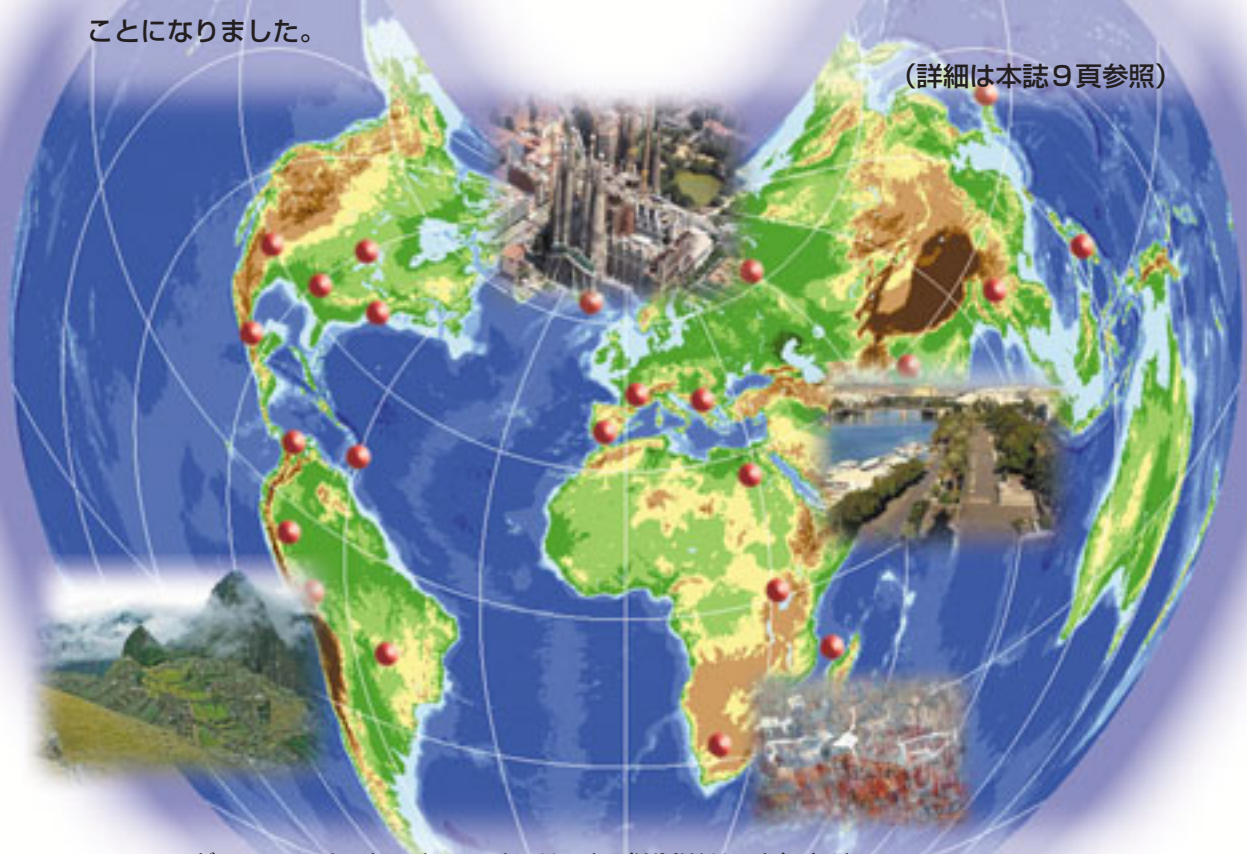
(財)京都市景観・まちづくりセンター ニュースレター

パートナーシップで進めるまちづくり

～京町家の保全・再生を世界に発信～

世界の歴史的建造物などの文化遺産の保護・保全活動を行っている国際民間組織「ワールド・モニュメント財団」が発表した2010年版「ワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト」に「京町家」が選定され、全世界に、京町家の現状と保全・再生の必要性が発信されることになりました。

(詳細は本誌9頁参照)

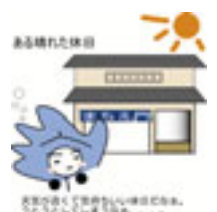


ワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト (WMWリスト) とは

ワールド・モニュメント財団 (1965年、ニューヨークに設立) が1996年から隔年で、危機に瀕し、修復・保全が求められる文化遺産を100ヶ所選び、リストとしてまとめ、世界中に配信し保護活動の必要性を訴えるというプログラムで、今回が8回目となります。今までのWMWリストに登録された文化・歴史遺産にはタジマハール、万里の長城、ポンペイ、王家の谷など著名なものから、ガーナのララバンガ・モスクやキューバの国立美術学校などのあまりなじみのないものまでが含まれます。

今回、2010年版リストに選定された文化遺産は47ヶ国、93ヶ所です。有名な文化遺産は、ユネスコ世界遺産のペルーのマチュ・ピチュ、スペイン (バルセロナ) のサグラダ・ファミリア、セビリアとトレドの歴史的景観が含まれます。日本からは唯一、「京町家」が選定されました。

「京町家」のWMWリスト登録は「とも 瀬の浦」に次ぎ、日本で2例目です。広島県福山市「とも 瀬の浦」は2002年、2004年の過去2回登録され、2004年12月に同地区にある坂本竜馬ゆかりの町家、旧魚屋萬蔵宅再生の支援につながりました。



地域紹介 第3回「淀学区」

～水のまち「淀」の歴史とまちづくり～

伏見の南にある「淀学区」は、昔から桂川・宇治川・木津川の合流点にあり水陸交通の要地として、街道が発達し、魚市場や淀城城下町、宿場町として栄えてきました。現在は、宅地化が進み、土地利用も変わってきましたが、地域には歴史が息づいています。2008年から実施している京町家まちづくり調査でご協力いただいた淀学区の方にまち歩きをしながらご案内いただいた淀の歴史と、まちづくりの取組を紹介します。

案内：長尾博氏（淀連合自治会副会長）、野村昂氏（淀連合自治会副会長）



淀今昔マップ

■ 中世から近世にかけての水の気配

淀は現在でも周囲に三川が流れ、水の気配が感じられます。現在、住宅が立ち並ぶ場所には昔、巨椋池（京都府最大の淡水湖、昭和初期の干拓事業により消滅）があり、平安時代の文献に「奥等津」と記されていたことから港として利用されていたことがわかっており、昔から水と関わりが深い地域でした。現在でもあちこちに高低差があり、当時の様子を垣間見ることができます。

淀の真ん中を通る大阪街道を南へ歩き、孫橋を越えると少し外れて、秀吉の都市改造の際に集められたお寺が3軒並んでいます。一番奥のお寺の裏にある竹林には昔、十石舟がはしる水路があったそうです。

淀城はこれまでに二度造営されています。初めの古淀城は現在の淀城跡公園より北の納所に築かれたましたが、伏見城の完成と共に取り壊されました。その後、江戸時代に現在の淀本町に築かれた。淀に城が造営された理由は地



昔の木津川を堰き止めていた土手

政学的に三川が合流し、大阪や奈良へ向かう街道があり、水陸交通を掌握・管理できる自然の要塞という地が、京都の防衛線「軍事的な要所」と評価されていたからです。

■ まち歩き（大阪街道～淀城跡公園）

大阪街道沿いには寺社が点在していました。伊勢向神社はその名の通り、伊勢や高野山へ向かう前にお祈りをする神社です。奈良街道沿いは古くから住む人が多く、かつて商人町として、淀城に商品を届け、武家屋敷相手に商売をしていたそうです。

天満宮の夏の夜祭りと秋の奥の院神社の祭りは地域の人が交流する場になっているそうです。淀は古くから住み続けている人より、新しく淀にいられた方の方が多く、古くからの住民の約3倍の新しく転入された住民が暮らしています。祭りは新・旧住民が集う大切な行事になっているそうです。



大阪街道

■ 淀学区のまちづくりの取組

淀学区の南側にある淀水路は一部、親水公園になっており、淀のまちを彩るために住人の希望で河津桜が植えられました。植樹をきっかけに、淀緑地公園愛護協力新町会と下津会が中心となり清掃活動が行われるようになりました。「協力し合いながら地域の共有財産を大切にする」この淀水路の環境保全活動を通じて地域コミュニティの活性化を目指されています。

現在淀学区では、京阪本線淀駅の高架化工事が進められています。2011年には、現在の淀城跡公園側から北側の京都競馬場側へ移転する予定です。これにより、淀駅から競馬場への人の流れが大きく変わるため、駅前の商店街など、地域経済への影響も心配されています。

そのような状況の中で、地域活性の基盤となる「安心・安全な暮らしの確保」と「住民交流の促進」を目的に、今年の7月、安心安全ネットワークが設立されました。その取組として「地域の安心・安全マップ」の作成に取りかかれています。

まち歩き最中に、地域の方から「近年、街道に多くの自

動車が走るようになり、以前より狭い道だと感じている」という声を聞きました。歴史的遺産を守りつつ地域の活性化の基盤として、「安心・安全」に暮らしていく為の対策の重要性を感じました。

また「今後、地域で大切にしてきた淀水路の端から端まで河津桜を植え、遊歩道にしたい」という話もされているそうです。暮らしを快適にするまちづくりだけでなく、淀の深い歴史を振り返り、地域資産として活用することも非常に大事なことだと感じられたまち歩きでした。(木下良枝)



淀水路の河津桜

写真提供：「桜を育てる会」川崎莞爾氏

【参考文献】「淀の歴史と文化」(西川幸治編/淀観光協会発行)



誰もが立ち寄れる場、気軽に交流できる場、このような場所がまちの中にぽつぽつとできてきています。私たちはこれを「まちの縁側」と呼び、地域コミュニティの新しい形として注目しています。

センターでは、これまでシンポジウムやニュースレターで、「まちの縁側」の活動を紹介しましたが、今回、連載記事として、それぞれのまちの縁側主人に活動の紹介をしていただくことにしました。第3回は、右京区宇多野で活動しておられる特定非営利活動法人「フォーラムひこばえ」事務局長の井上公子さんの登場です。

「地域の中にまちづくりの輪を」

特定非営利活動法人 フォーラムひこばえ
事務局長 井上公子

「地域社会を豊かにすることは一人ひとりが暮らしやすい地域にする事を願い、自分たちに出来ることから動き始めること」フォーラムひこばえは住民主体の地域福祉活動を支援する団体として、2005年2月に設立された特定非営利活動(NPO)法人です。赤ちゃんからお年寄りまで誰もが集える事業を行う中で、地域の人たちの交流をはかり、みんながゆるやかにつながりあって暮らす社会をめざして活動してきました。

ひこばえの事業は、大きく分けて学童保育や子育てを通して地域がつながり合える京都市認可の児童館事業と、地域の人たちが集い交流を深めるサークル活動やサロンなどのひ

こばえ事業に分けられます。どちらの事業も相互に連携しあいながらコミュニティセンターとして活動しています。

ひこばえは自然に囲まれた心いやされる場所です。

もと設計士の自宅を借りているので樹木も多く、いろんな虫や鳥、動物たちがやってきます。古くからあった建物を上手く活かして改修し、本館や児童館の建物に利用しています。ただ土地や建物の所有はまだ賃貸のままなので、貸主には大きな負担をかけている部分もあり、今後の解決課題です。

ひこばえができてから、子どもたちが「今日、ひこばえのおばあちゃんに会ったよ。元気そうやった。」と言ったり、お年寄りの中からは「この子、ちょっと見ん間に大きくなったなあ。」というような声が聞かれます。これからもひこばえで知り合えた人達が、地域の中にまちづくりの輪を広げていけるように、活動していけたらと思っています。



会食会のあとのひととき



みんなで改修した本館



京都まちづくり学生コンペ2009 「京都における近隣型商店街のこれから」 フィールドワーク企画@京都三条会商店街の報告

今回のコンペは、京都の身近な商店街にスポットを当て、地域住民の日常生活を支える商業施設、地域コミュニティの場としての商店街について、これからの可能性を示唆するアイデアを広く学生に求めました。



キックオフ・ワークショップの様子

7月末の応募登録締切り時点で44グループの応募登録がありました。8月8日のキックオフ・ワークショップには、80名の学生が参加し、京都のまちづくりや商店街の現状、取組内容などについて学ぶ機会となりました。

スケジュール：

応募登録締切	7月31日
キックオフ・ワークショップ	8月8日
フィールドワーク企画	9月16日、25日
作品提出締切	10月30日
第一次審査	11月上旬
公開プレゼンテーション及び第二次審査	12月6日
展示会	12月7日～20日

現地調査のモデルケース体験企画として実施した京都三条会商店街でのまち歩きでは、60名の学生が参加しました。商店街の「魅力」と「課題」をテーマに、当日振り分けた違う大学・学部で混合チームで調査を実施、その後テーブルワークで「フィールドマップ」を作成し、京都三条会商店街振興組合の方々の前で発表・意見交換をしました。

地元の子供たちの姿や、商売を通じた地域住民とのコミュニケーション、駐輪問題や街並みの連続性など、それぞれの視点による「魅力」と「課題」が出てきました。

一度の現地調査で現状を知ることは難しいですが、現場の方々の生の声を聞き、今後も商店街やまちづくりに関心を持ってもらうきっかけづくりになったのではないかと考えています。



各チームでヒアリングを実施



テーブルワークの様子



発表・意見交換会

(木戸環希)

まちセン深草探検団レポート 式の巻

稲荷・砂川・深草・藤森・藤城の5学区からなる深草地域は約6万3千人の住まう、歴史的な町並みの残る地域と新しく宅地開発された地域の混在する、自然豊かな地域です。2008年度には、深草地域でははじめてとなる「京町家まちづくり調査」(京町家の悉皆調査)を実施し、稲荷・砂川・深草・藤森の4学区内に約2千3百軒の町家が残っていることが分かりました。

各学区によって地域の特色や自治活動の方法も様々な深草地域についてレポートします。(前回は京まち工房47号に掲載)

9/12(土)

～コミュニティラジオ局から、深草の魅力を発信！～

NPO法人「京都・深草ふれあい隊・竹と緑」さんに出演いただきました。

京都三条ラジオ・カフェ(79.7MHz)で公成建設さんと共同で運営しているラジオ番組『公成建設 まちづくりチョビット推進室』に竹と緑の皆さんにご出演いただき、「深草地域の竹林整備を通じた市民と行政の連携したまちづくり」について、お話いただきました。深草探検団(※1)も、聞き役として出演しています。

※放送内容は、ホームページで公開しています。

『公成建設 まちづくりチョビット推進室』

<http://www.kohsei-const.co.jp/chobitto/chobitto.html>

10/1(木)

～伏見工業高等学校での授業「景観まちづくり」～

地域の方々に、まちのことを教えてもらおう!

京都市立伏見工業高等学校と京都府建築士会が共同で実施する授業「景観まちづくり」運営のお手伝いには参りました。7月の授業「景観まちあるきの視点」ではNPO法人古材文化の会の永井規男会長にご協力いただき、8月下旬のまち歩き学習では、砂川学区と深草学区の方々に地域のことを教えていただきながら、気になる景観写真の撮影や地域の方へのヒアリングなどのフィールドワークが行われました。10月1日(木)の発表会では、5つのグループがそれぞれの景観マップを発表。生徒さんの目線から、様々な地域の姿が浮かび上がってきました。



授業発表会の様子

10/18(日)

～「第19回深草ふれあいプラザ」におじゃましました～ 神社の境内が、賑やかなコミュニティスペースに変身

深草ふれあい事業実行委員会主催の交流イベント「深草ふれあいプラザ」にブースを出展し、古い小学校校舎の写真の展示をしました。会場は勝運・学問と馬の神社である藤森神社境内。いつもは静寂に包まれた境内が多く、多くの来場者で賑わい、地域の方々の温かさに触れられた一日でした。



会場の様子

11/1(日)

～「ふかくさ市」におじゃましました～ 古い写真から飛び出す、まちの記憶。

深草地域には農家が多く、新鮮な野菜が様々なところに出荷されています。深草支所では、今年から野外広場で「ふかくさ市」の開催をはじめました。地元野菜の即売や竹細工ひろばなど様々なブースが設けられ、地域の皆さんのにぎやかな交流の場となっています。



古いアルバムで大盛り上がり!

当センターもブース出店をさせていただき、深草地域の皆さんにお借りした古い写真の展示(※2)を行いました。深草管内のほか伏見区内各所からご来場いただき「この写真はどこで撮られたものだろう?」等々、思い出話で大盛り上がりでした!

探検すればするほど出会える、深草地域で活躍する魅力的な方々や各学区の個性。地域のことを知るきっかけ・交流のきっかけともなる古写真の展示は、今後も引き続き実施していきたいと思っています。

※1 深草探検団とは深草のまちの魅力を知り、発信していく取組を始めたセンタースタッフのこと。

※2 「まちかどアルバム」昔の思い出の写真を地域で集めて、話をしながら眠っている「まちの記憶」をよみがえらせます。地域内のコミュニケーションや「まち」と「ひと」との多様な関わりを生みだすきっかけづくりの取組です。深草でも開催を予定しています。(京まち工房43号参照)

(田中志敬、大屋みのり)

学区全域での土地利用ルールを提案

～有隣学区の地区計画に関する取組～

下京区の有隣学区では、2002年に有隣まちづくり委員会を発足し、①急増するマンション住民との交流、②元有隣小学校の跡地活用のあり方を重要課題と位置づけ、まちづくりの取組をされてきました。さらに2008年6月からは、その取組の意義をより多くの学区民と共有して進めるために、有隣まちづくり委員会の中に「有隣まちづくり構想・学校跡地ヴィジョン委員会」を結成して、まちづくりヴィジョンとその実効性を高めるための地区計画の策定に向けた検討をされてきました。

そして、有隣学区のまちづくりヴィジョン『ぬくもりある暮らしが息づくまち有隣へ』と3つの目標をもとに定めた「地区計画の方針」と、建築物の用途に関するルールを内容とする「地区整備計画」の素案をとりまとめ、2009年の10月29日に京都市長へ地区計画策定の要望書を提出されました。

これは職住共存地区において、学区全体を区域とした地区整備計画の要望書提出の第一号となります。なお、このまちづくりのヴィジョンは2010年中に冊子として取りまとめられ、広く住民に情報共有される予定です。(田中志敬)

3つのまちづくりの目標	
①安全で安心して暮らせる有隣をめざします	
②地域の歴史と文化を掘り起こし、伝統と暮らしが息づく有隣をめざします	
③高齢者の知恵と若者の発想が活かされる有隣をめざします	
地区整備計画で制限する建築物の用途	
①風俗店：マージャン屋やパチンコ屋、また、個室付浴場業に係る公衆浴場等の風俗店の出店を規制	
②共同住宅（マンション）：40㎡以上の住戸が2/3未満の戸数を占める共同住宅の建設の規制	
③倉庫業を営む倉庫 ＊ただし、建物に附属した倉庫等は規制の対象外	
④大規模な駐車場 ＊ただし、五条通、河原町通に面したところは除く	

(有隣学区の取組は学芸出版社発行の「まちづくりコーディネーター」で詳しく説明しています)

西竹の里タウンハウス「住む人の喜びと誇りを永遠に」引き継ぐための取組

洛西ニュータウン西南に1982年に完成した、敷地を共同所有し「環境と住まいが一体となって生まれた新しい集住体」が西竹の里タウンハウスです。

西竹の里タウンハウス管理組合の環境を守るための取組を報告します。

一斉改修で見違えた街並み

建築後20年も経つと修繕が必要です。当初は専有部分が所有者が独自に修繕、施工業者や時期の違いにより微妙に色合いが異なり、まちなみの統一性が薄れてきました。管理組合では、説明会等で理解を広め、修繕積立費を増額、平成15年に屋根の葺き替え、平成19年に外壁の塗装を一斉にされました。その結果、住民の満足度向上につながり、街並みを評価して転入する若い層も現れ、平成20年には「住まいのまちなみコンクール」において国土交通大臣賞を受賞されました。



西竹の里タウンハウスの街並み

国土交通大臣賞受賞を契機に住民の関心を高める

タウンハウスでは、以前より共用広場で花壇づくりやバーベキューを行うなど、親交を深めておられましたが、受賞を契機に報告会を開催、夏祭りでは、まちの歩みに関する展示を行うなど、まちの良さについて共感を広める取組を重ねてこられました。



国土交通大臣賞

将来の住環境を展望して

今後も建築協定を守るとともに、守るべき地域環境の将来像やそれを実現するためのリフォームルールを検討されています。また、一緒に環境づくりをしていきたいと考える方に住んでもらえるように、まちびらき30周年を目前に迎え、今までの歴史を記念誌にまとめる話も出ています。

住環境を受け継ぎ、守っていく方々の熱い思いに触れ、センターも一緒に考えていきたいと思っています。

(中島吾郎)

全国まちづくり会議2009in川崎に参加しました

9月21日(月)、22日(火)に開催されたNPO法人日本都市計画家協会主催の「全国まちづくり会議2009in川崎」のパネル展示にて京町家まちづくりファンドのPRをしてきました。

全国のいろいろな形のまちづくりに関係する方々が来られ、北は北海道から南は熊本まで様々な方に出会うことができました。地域主体のまちづくりに積極的に取り組まれている人、グリーンやエコの活動をされている人、地域活性化を目指している人など様々な方たちが参加されていました。中でも、京町家と意外な共通性を感じたのは、「都市農地」。税金や相続、法律の面での悩みに共通性がありびっくりしました。

「温暖化」「国際化」「少子高齢化」「地方分権」「ステーキホルダー(利害関係者)」「社会的意義」など、キーワードはたくさんあります。日本社会のこれからの未来像をどのようにストーリーを作るかが都市計画のポイントだと感じました。



京町家まちづくりファンドのブース

一方、地域で頑張っている方々の話を聞くと「まちづくりは道楽。楽しめないとやってられない。」という声もあり、楽しい活動が楽しいまちを生んでいくというその原点を見た気がしました。(井上和子)





景観・まちづくり大学2009 開講中！



10月～11月に開催されたセミナーを報告します

※今後のセミナーの予定は12頁参照

京のまちづくり史セミナー (10月24日)

歩いて学ぶ京の水①—琵琶湖疏水と岡崎のまちづくりを学ぶ

講師：中川理氏（京都工芸繊維大学教授）

講座形式の第一期に代わり、第二期（10月～12月）は実際に市内を歩きながら京都のまちづくりを学ぶ「まち歩き」の形式で開催しました。

今回は、京都の近代都市史や建築がご専門の中川理先生を講師にお迎えし、京都の近代化政策の一環として行われた琵琶湖疏水の開拓事業と岡崎地区のまちづくりについて教えていただきました。

前半は、無鄰菴の母屋の二階から美しい庭園風景を横目に、琵琶湖疏水ができるまでの経緯や当時の時代背景、事業の社会的意義などについてレクチャーをしていただきました。

後半は、実際に蹴上のインクラインから琵琶湖疏水の遺構や施設などを参加者全員でめぐりました。西欧的デザインの施された第一疏水のトンネルや、宮廷建築家・片山東熊により設計された九条山のポンプ室など、中川先生ならではの視点で近代京都のまちづくりについてお話しいただき、最後は疏水開発において最も大きな功績を残したともいえる田辺朔郎像の前で受講者の皆さんと意見交換を行いました。



現地で疏水の説明を受ける様子

まちづくり実践塾

(9月12日)

地域文化を学び教える方法とは ～地域への愛着を育む「まちマナビ」の事例

講師：岡藤茂吏氏(紫野教育後援会)

9月のセミナーでは、子ども達に地域の歴史文化を伝えながら、まちへの愛着を育んでいく「まちマナビ」をテーマに意見交換会を行いました。紫野学区のまち歩き事例では、船岡山など普段は子ども達だけでは入れない場所のことや、学校の了解のもとで参拝の作法なども教えているなどの報告がありました。後半の意見交換会では、参加者の地域の取組に加え、大学生が行っている取組の紹介がありました。

なお10月のセミナーは、続き企画として、京都文化博物館主任学芸員の南博史氏を講師に、「地域文化を学び教える方法とは～地域密着型のまちなか博物館・京都文化博物館の取組」をテーマに開催しました。



まち歩きのスライドショーの様子



まち歩きで参拝の作法を学ぶ子ども

また11月のセミナーは、京都中小企業家同友会協働企画として、(有)エスアールフードプロデュースの斎藤三映子氏を講師に、『食』を触媒にしたまちづくりのプロデュース～伏見の特色ある食材を生かした『地域ブランド食品』作りの取組から』をテーマに開催しました。

京町家再生セミナー

(10月31日)

再生された町家めぐりと再生の知恵—町家再生物語 改修のポイントから活用まで

講師：西村孝平氏（社）京都府宅地建物取引業協会）
木村忠紀氏（京町家居住支援者会議）

「京町家再生セミナー」は、毎回いろんな団体さんにお世話になっています。10月31日に開催された第4回のセミナーは、(社)京都府宅地建物取引業協会さんと、京町家居住支援者会議さんに企画・運営していただきました。セミナー会場も含め、3軒の再生町家を見学でき、専門家のお話も聞けるということからか、事前締切りを行わなくてはならないほど、申込段階から盛況でした。当日の参加者はお子さんも含め33名。セミナー会場の「京都自由大学」が人でいっぱいになりました。まず、京町家支援者会議さんの木村棟梁より、町家を長く使う為に、所有者・居住者ができること、また専門技術者ができることについてのお話、(社)京都府宅地建物取引業協会の西村氏より、町家の再生・活用の最前線の様々な事例をお話いただきました。その後、小規模多機能施設として地域のお年寄りの居場所に生まれ変わった小規模多機能福祉施設の京町家「松原

のぞみの郷」を設計者の野村氏に、ギャラリー&ショップとして生まれ変わった「京町家ぎやうりい董」を店主の大工園氏に案内していただきました。そして最後は、セミナー会場に戻って豪華商品付きのクイズ大会。参加者の皆さんの頭と体にしっかり町家のことが刻み込まれたことでしょう。



講義会場の「京都自由大学」



「松原のぞみの郷」

町家所有者・居住者の集い (10月18日)

受け継いだ町家のよさを活かす～町家を拠点としたつながりづくり～

ゲスト：振本ありさ氏(アリサ・ハウスミュージアム主宰)

受け継いだ町家を改修し、「ハウス・ミュージアム」として再生されたアリサ・ハウスミュージアムを訪れ、主宰者の振本ありさ氏からお話をうかがいました。

振本氏は、ボストンでハウス・ミュージアムとして公開された生きた家の保全・活用方法に感銘を受け、帰国してから「できる範囲で無理なく、楽しく」運営されることを心がけておられます。

参加者の皆さんからは、町家のもつ魅力として「欄間などの建具や家のパーツ一つひとつ」や「暮らしそのもの」という意見があげられ、活かし方として落語会、ゲストハウスなどのアイデアが寄せられました。

一方で、活用しようと思うとき、そこには色々な不安もでています。冷え込む冬の過ごし方、職人さんとの付き合いの仕方、情報発信の仕方、施設運営をどうしたらよいか等々……。これ



見学の様子



アリサ・ハウスミュージアム

から町家を活用したいと考えておられる方にも多くご参加いただき、率直な意見や感想が飛び交いました。

町家のよさを活かそうと思うとき、関わる方と町家の個性の数だけストーリーと答えがあると思います。一足飛びに答えをだすことはできませんが、このような場にどんどん参加していただくことで、より多くのヒントが生まれそれぞれのストーリーを育てていただけたらと考えています。

第3回全国町家再生交流会

10月17日、18日、石川県金沢市において京町家ネット(京まち工房28号参照)主催の第3回全国町家再生交流会が開催されました。(※)

2日間とも雨でしたが、約150名の方が石川県内外から参加され、北は函館から南は大分まで、各地で町家の再生に取り組まれている方々が一堂に会しました。

初日は、こまつ町家再生アドバイザーの山口哲央氏による小松市での取組報告とNPO法人金澤町家研究会幹事小林史彦氏による金沢市での取組報告がされました。

その後、5つの分科会に分かれて討議を行い、京町家ネットから京都における先駆的な取組が報告されました。

[各分科会のテーマ]

第一分科会:町家住まい手に対してどのようにアプローチすべきか

第二分科会:空き町家所有者にどのようにアプローチすべきか

第三分科会:不動産業者との連携のあり方について

第四分科会:町家住まいを希望している人は何を必要としているか

第五分科会:技術者と町家修復・再生の仕事のマッチングのために何が必要か

夜にはお楽しみの町家居酒屋交流会で、各地で町家を支えている方達と交流を深めました。

2日目の全体会では各分科会からの報告があり、全体で討議を行いました。

町家の再生には、地域を超えて共通して考えることができる課題と、地域特有の課題がありました。特に町家修復・再生に携わる技術者が抱えている問題や空家の問題は、どの地域でも共通の課題でしたが、京都以外では、不動産業界が町家を不動産物件として取り扱うノウハウが不足している、そもそも町家が残っている地区に不動産業者が存在しないなど、地域によっ



全体会の様子



会場



金澤町家



金沢のまちなみ

て状況は相当違うようでした。

興味深い話として、金沢の東山地区では、金澤町家研究会メンバーの関係者が地域全体の状況に目配せをするエリアマネージャー的な役割を担い、町家に関する悩みごとを事前に把握できているとの報告がありました。町家巡遊で公開される町家も一人暮らしの高齢者のお宅を中心に交渉され、町家の公開を機に、家もお年寄りも元気になったということです。「おせっかいが大切」と言われていたことがとても印象的で、町家を保存・再生することはただ単に建物を保存することではなく、まちづくりにつながっているということを改めて認識しました。

オプションである18日午後の町並み見学会のときには雨もあがり、金澤町家研究会の増田氏の案内で、昔の地図と現在の地図を見比べながら楽しいまち歩きとなりました。

(浜谷富美子)

※過去の開催については京まち工房32号、42号参照





京町家まちづくりファンドの取組



ファンド寄付拡大



京町家まちづくり散歩 2009

Machiya and KYOTO Walking 2009

10月30日から11月15日まで開催された歩いて暮らせるまちづくり推進会議主催の「まちなかを歩くウィーク2009」の一環で、当センター主催の「京町家まちづくり散歩2009」を実施しました。期間中、京町家のこと、まちのことを知ってもらうきっかけ、京町家の保全・再生につながる支援のきっかけとなればと思い「祇園祭・山鉦町とその周辺の散策」をテーマにしたマップを配布し、8日に、センター主催のガイド付きツアーを催しました。地元にお住まいの木村正之さんと河野泰さんをガイドにお招きし、住民の方ならではの逸話をお話いただきました。ツアーでは、京町家まちづくりファンドで応援した「八幡山町会所」と「今井邸」を見学しました。ツアーの最終地点である「ちおん舎」では、お抹茶とお菓子をいただきながら、西村吉右衛門さんから家の歴史をお話いただきました。また、蔵やお茶室も見学しました。今回の参加費の一部は京町家まちづくりファンドへの寄付に繰り入れます。



今井邸見学



ちおん舎

今井邸

長年住み継いできた町家を改修し、引き続き住み続けていきたいという思いで改修されました。以前この町家で使われていた格子が残っており、その格子を利用して出格子を新設されました。11月15日に開催された「おいでやす染めのまち本能」(主催：本能まちづくり委員会)の「のれんの華スタンプラリー」の取組にも参加され当日は伝統色に染められた「のれん」で彩られました。



改修前



改修後

京町家まちづくりファンドの取組が 日本不動産学会「平成21年度業績賞」を受賞

2009年10月、日本不動産学会から、新機軸を打ち出した不動産事業やそれにかかわる制度の創設など、幅広い対象の中から優秀な業績を表彰する「業績賞」に「京町家まちづくりファンドの取組」が選ばれました。京町家の変容に胸を痛められた篤志家の方からの京都市への寄付を契機に、2005年9月にセンターが設立した京町家の保全・再生を推進するための基金「京町家まちづくりファンド」。この基金を活用して、2006年度から、京町家を良好な形で次代に残していくための保全・再生に取り組まれる所有者・居住者を支援するため、「京町家改修助成モデル事業」を実施(現在39件の再生プロジェクトを支援)しており、あわせて、京町家の価値を周知するための啓発事業や基金拡充のための寄付拡大の取組も行っています。

一般の不動産市場で注目されることが少ない京町家ですが、最近、適切に改修された京町家には市場を通じた資金供給も増えつつあることが確認されており、京町家まちづくりファンドの取組もこのような流れに貢献しているということが高く評価され、



受賞の運びとなりました。基金の認知度が上がるにつれ、モデル事業への応募も増え、また、京町家に関わる様々な方々のご協力により、募金箱の設置や寄付付き商品の

販売など、取組の周知や資金集めの活動も展開しています。こうした活動の成果が、伝統的建築、あるいは日本文化そのものの価値を見直す全国的なさらなる動きにもつながっていくものと期待しています。これまで、センターの活動を応援してくださった方々に謝意を表するとともに、気を引き締め、変化する社会情勢に柔軟に対応できる事業を展開していきたいと思います。

(伊藤真嗣)

～京町家の保全・再生を世界に情報発信～ ワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト「京町家」を選定

2008年11月、ニューヨークで開催されたワールド・モニュメント財団(以下、WMF)と京都メンバーとの協議(※)をスタートに、国を越えた協働が始まりました。そして、京町家保全・再生に対する世界的な支援を働きかけていくため、2009年3月、申請者が長年、京町家の市民活動で携わってこられた小島富佐江さん、推薦者兼事務局が(財)京都市景観・まちづくりセンターとなり、ワールド・モニュメント・ウォッチ・リスト(以下、WMWRリスト)へ「京町家」を申請しました。

2009年10月6日、2010年版WMWRリストが発表され、米国の主要メディアや、ロイター通信、共同通信を通じて世界中に京町家が選定されたことが報道され、注目が集まりました。10月23日付のFINANCIAL TIMES(英国、経済新聞)では京町家をはじめ建築家フランク・ロイド・ライト設計のタリヤセンの建造物(米国・アリゾナ)など5つの文化遺産が特集されました。

WMFによる京町家の選定理由は「①歴史的かつ木造建造物としての重要性をもつ、②坪庭、中庭など、空間構成に光と風、緑を創出するなど自然環境に配慮した伝統的生活様式を伝える、③経済成長のなかで日本の伝統的な地域が直面する問題を象徴的に抱えており、このことは世界の多くの都市部においても見られることで、町家再生の動きは日本のみならず、歴史地区をもつ世界中の他の都市にとっても参考になる。」と挙げられています。門川大作京都市長は、10月7日付で『京都の歴史文化の象徴である「京町家」の魅力を世界に発信し、保全・再生する呼び掛けが結実し、喜ばしい。ご尽力いただいた関係者の皆様に感謝し、「京町家」を世界の文化遺産として継承していくため、一層努力したい。』とコメントされました。

当センターでは、今後、海外・国内を問わず、京町家の保全・再生に対するより多くの方のご理解とご協力をいただけるよう、一層関係者とともに情報発信に努め、継続して協働による取組を進めていくこととしています。また、京町家に関わる教育・研修拠点、地域の方や京町家の所有者・居住者のサポート活動拠点とする改修プロジェクトの構想を関係者の皆さんと検討しており、海外からの支援を受ける先進的な取組としたいと考えています。

関係者のコメント



ワールド・モニュメント財団
日本代表 稲垣光彦氏

今日の京町家が抱える課題は、都市開発と文化遺産保護の難しさという点で、サグラダ・ファミリア(地下鉄工事)やトレドの歴史的景観(隣接地域開発)等、世界中の都市圏に文化遺産を抱える地域社会に共通し、且つその再生に向けての活動は象徴的です。職住一体型の伝統的木造建築として歴史的景観を構成し、且つ自然環境と調和した生活様式を今日も活かし続けている京町家。今回のリスト選定を弾みとして、是非貴重な文化遺産として後世に継承すべく力を合わせていきましょう。



NPO 法人京町家再生研究会
事務局長 小島富佐江氏

京町家再生の活動はこれまでに様々なことを試み、それまでの古い木造住宅への偏見、見方を大きく変えるきっかけとなり、今の日本の住宅の考え方にも再び影響を持ち始めています。しかし、今も次々と取り壊され日々減り続けているのも事実です。

今回のWMWRリストへの選定は世界的な視点で京町家の歴史的・文化的価値を評価して頂き、町家居住者に住まうことへの自信を与えて頂きました。また今後の取組に大きな勇気と力をもらいました。



ジャパン・ソサエティ(ニューヨーク)
バイス・プレジデント ダニエル・ローゼンブルム氏

京町家プロジェクトは、2007年11月にジャパン・ソサエティの日米イノベーターズ・ネットワークの事業の一環として京都市景観・まちづくりセンターと共催で、「コミュニティの活性化と『包容力』がある共同体創り」という会合を開いたのがきっかけとなりました。この会合では、文化や芸術がコミュニティの活性化に果たす役割から、町家の重要な役割について話し合われました。数ヶ月後、この会合に参加した主な米国人と日本人が私のニュージャージー州の自宅に集まり、招いたアメリカの歴史保存家とともに、京町家を国際的に認知してもらうために何ができるか意見を出しあいました。そして2008年11月には、再びセンターと共催で当ソサエティにおいてシンポジウムと円卓会議を行い、日米の歴史保存家の関係が確固たるものになりました。そのような一連の出来事の集大成が2010年のウォッチリストにつながっているかと思います。当ソサエティは今後も、この重要な歴史保存運動の支援を続けていく所存です。

※京まち工房45号 海外発信プロジェクト参照



平安建材株式会社

京都市景観協会
KYOTO CITY SCENES ASSOCIATION

ローム株式会社

社団法人
京都府建築士事務所協会

京町家保全・再生の事例

秘めた思いが現実に

京町家の宿 東山三条 白川庵 (東山区)

「あの～、うちの町家について相談にのってくれませんか?」。6月のとある日、元気な女性からお電話がかかってきました。東山三条の白川沿いで和菓子屋さんを営んでおられる川嶋さん。お店のすぐそばにお持ちの町家を、そのままにしておくのはもったいないので何か活用できないか、と常々新聞や雑誌などから情報収集されていたところ、センターの町家の保全・再生の取組が掲載されている新聞記事に目がとまり電話をかけてくれました。

さっそく訪問してみると、京都を舞台にしたドラマでよく出てくる、柳と一本橋が目の前に広がるお宅。二階の窓辺に腰掛けて外を眺めたときに出た「贅沢な風景ですね」という言葉に、「私ね、ここを宿にできたらなあと思うのよ」と川嶋さん。お話を聞いていくと、宿をしたいという思いが以前からあったようです。しかし、何から手をつけてよいか、どれくらいの費用が



柳と橋のおなじみの風景



格子からの眺め

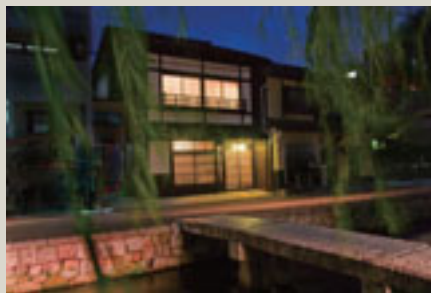
かかるのか、また、運営にどれくらいの労力がかかるのか、など見当がつかなくてその思いを心の内に仕舞っておられました。実際には、戦前の木造住宅である町家を宿泊施設にするには法的側面で課題が多く、手続きにもかなりの手間と時間がかかるようです。

7月中頃のこと、「東山三条の町家を宿にすることになり、8月初旬に改修工事、秋の紅葉の季節にはオープン予定です」と連絡が入りました。私たちが訪問してから1ヶ月弱で、こんなに早く動くとは！川嶋さんの行動力と決断力には驚きでした。「やっぱり宿をやってみたかったのと、この景色をいろんな人にも楽しんでもらいたくてね」と川嶋さん。以前から、町家の宿泊施設の普及に取り組まれ、町家の宿や京都観光の情報を発信されている町家プランニングの田谷さんに相談し、進めてこられたそうです。「この先、和菓子屋さんとの二足のワラジで大変になると思うけど、楽しみだわ」とおっしゃっていました。

改修工事は、約2ヶ月。旅館営業に必要な改修を行うとともに、老朽化の見られた壁や畳を修復



室内の様子



夜は一層落ちついた雰囲気

し、6つあった畳の間の2つを板の間に変更してモダンな雰囲気も取り入れ、奥庭もきれいに手入れされています。無事、旅館営業許可が下りたのは11月の始め。当初から、紅葉の観光シーズンまでにはオープンしたいと目標を立てて進めてこられたので、オープンに向けて順調な滑り出しを切りました。

11月12日に白川庵はオープンしました。二足のワラジを履いた川嶋さんにとって初めてのお客様に、宿の間取りや設備の案内のあと、ご自身の和菓子屋さんの栗もちでもてなしをされたところ、大変喜んでいただけ、「お友達の家にいるような感じで居心地がよい」、とチェックアウトの11時ギリギリまでくつろいでおられたとのこと。川嶋さんは、「たくさんの方に来てもらえて、くつろいでもらえるお宿にしていきたい。お饅頭作りにも気合が入るわ」とおっしゃっていました。



こちらが川嶋さん

インターネットサイトで8月から白川庵の改修状況などをお知らせしていたところ、予約開始前にも関わらず、問い合わせが20～30件あったそうです。買い物をしたりお食事をしたりするだけの町家ではなく、実際に住んで町家を味わってみたいと思う方が増えてきています。宿泊型観光の推進の面では、京都市も、町家の宿泊施設としての転用を進めるため、法的課題を解決していくことを掲げています。白川庵のような事例が、京町家の保全・再生・活用の一形態となっていくのではと感じました。

東山三条白川庵 (<http://machiya-inn.net>)

こちらのサイトでは、白川庵の他に、不動産業者として町家の売買や改修を主だった事業にされている(株)八清さんが11月にオープンした町家宿泊施設「城巽あかね庵」も紹介されています。年明けにはその他の宿もオープンされる予定です。

(堀 有輝子)



私と京都



株式会社 Hibana 代表取締役
松田 直子

「京町家から発信したい 京都の森を元気にする取組」

京都の暮らしや伝統文化に魅せられて、下京区の京町家に憧れて住み始めて7年になります。京町家は決して過ごしやすくないのですが、木に囲まれていると、なぜだか心が落ち着きます。すきま風だらけのわが家ですが、寒くなってくると、カラッコロ、コロカラッ、冬の恒例、可愛らしい音がします。この音の正体は、「木質ペレット」(※1)という木の燃料が転がり落ちる音です。今は、木質ペレットを燃料にした木質ペレットストーブで暖をとって、冬を楽しんでいます。

以前は、日によっては家の中は外よりも寒く、石油ストーブでは頭がのぼせるため、点けたり消したりを繰り返していたのですが、その問題も解消されました。火が点いてしばらくたつと、今度は部屋

が木の香りでいっぱいになります。音と香り、そして小窓から見える大きな炎で、疲れている時も癒されます。

さて、わが家にペレットストーブが来たのは4年前。ストーブを置いている1階は本当によく暖まります。暖まるまでに少し時間がかかるのが難点ですが、輻射熱でじんわりと体が暖まり、冷えに悩まされることもなくなりました。なにぶん古い家なので、安全性やメンテナンスの安心感などから国産のストーブを選び、玄関入ってすぐの畳の部屋に設置しています。ストーブが80kgと重たいので、少し床を補強する工事を行いました。簡単に設置できました。煙突は不要で、吸排気は窓かエアコンのダクト穴を利用するか壁に穴を開けるかのどちらかで行います。スイッチひとつで温度調節やタイマーセットもでき、とても簡単に使うことができます。炎の上の部分はオープンになっていて、簡単な調理もでき、餅や魚を焼き、料理をしています。



この木質ペレットストーブ、なんと!この11月から京都市で家庭用の購入助成(※2)が始まりました。購入費用(設置工事費込み・税抜き)の3分の1、上限20万円までが補助されるので、今から購入される方にはとても嬉しいお知らせです。太陽光発電や生ごみコンポストの助成と同様に、エコな製品です。京都市では右

京区京北地域にペレット工場を建設中で、市内の間伐材から生産される木質ペレットを利用することは京都の森を元気にすることにつながります。私は学生時代に熱帯林問題の活動に関わる中で、日本の林業や森林に関心を持ちました。その後、仲間とNPO 薪く炭く KYOTO で、森林バイオマス(森林資源の利活用)に関わる活動を始め、今は上京区の改修した京町家を拠点に森林バイオマスに関する事業やお店をしています。京都の森を元気にする取組をこの京町家から発信していきたいと思っています。いろいろなバイオマスグッズをそろえているので、どうぞお気軽に遊びに来てください。



株式会社 Hibana
所在地：京都市上京区下立売通大宮西入
TEL：075-803-6277
受付時間 9:00～18:00 (祝祭日お休み)
<http://www.hibana.co.jp/>

※1 間伐材などを直径6～10mm、長さ5～25mmに圧縮して固めた木質燃料
※2 京都市の木質ペレットストーブ購入助成について今年度の申請期間は11月30日に終了していますが、詳細については京都市産業観光局農林振興室林業振興課までお問い合わせください。
TEL：075-222-3346



連載コラム 第3回 ふっきーの徒然なるままに

自然との共生—日本と木の文化—

日本が木の文化を育んできた背景には、日本という国の風土がある。現代においても日本の国土はその65%から70%が緑豊かな山林であり、その山間の源泉を出でた清らかな水は、山間部を縫いやがて滔々とした流れとなって四方の海に流れ込む。正に日本は、自然の潤いのある豊かな恩恵を享受してきた国である。

この日本と木の関わりについては、古く神話の時代に遡る。神話の一書によれば、スサノオの子が天降るときに、樹木の種をたくさん持っていたが、これを日本全国に播き、青々とした国土を造成したのだと言う。

神話は、日本の成り立ちを神祕化するための創作と言われていところもあるが、何らかの歴史的事実を神話に置き換えて、

事物、事象の信憑性をあいまいにしようとしたものであるという説もある。ともあれ、私達の祖先は、類稀なる自然の美しさとその恩恵の下に歴史を積み重ね、優れた伝統と文化を育んできたことには間違いない。

さて、木の文化の重要なところは、木が生物材料であるということにある。

一定の年数に達した樹木を伐採し活用する代わりに、そのお返しとして植林し次代の樹木を育てていく。この、伐採・再生の循環を自然界の摂理の下に風土を変えることなく行うことによって、自然の産物を継続的に利用させてもらえるのである。

更に言えば、この伐採・再生が繰り返されることこそが、地球環境の安定に寄与することになると言えるのである。

よく山の緑を残せと言われる。樹木が炭酸同化作用によって二酸化炭素を吸収することを受けての意見であろう。しかし、樹木の炭酸同化作用は、その成長期にこそ活発なのであって、一定成長すると二酸化炭素の吸収量は少なくなってくるのである。

ここに、健全な林業の振興と、木の文化の継承の仕組を確立する意義があるのである。



センターからのお知らせ

書籍のご案内



まちづくりコーディネーター

編著：リムボン+まちづくり研究会
協力：京都市景観・まちづくりセンター
発行：学芸出版社

¥2,520 (税込)

A5判・224頁

地域における参加や参画、協働のまちづくりが盛んだが、成果を上げられないことも多い。成功例には活動の立ち上がり期から地域が抱える問題を冷静に捉え、解決の道筋を描き出し、合意を形成していく手助けをするコーディネーターが活躍している。影の主役である彼ら彼女らの役割、ノウハウを実践例から具体的に解き明かす。



京・まちづくり史

編集：高橋康夫、中川理
編集協力：京都市景観・まちづくりセンター
発行：昭和堂

¥2,310 (税込)

B5判・240頁

1200年を超える歴史の中、政治、社会経済、住民の知恵で随時、姿を変えてきた京都。明治期以降の人口増大、昭和初期の市域拡大、高度成長期の土地活用、車社会の進展と産業構造の変革等を受けて、「まち」の構成や土地利用は大きく変化していく一方、平安京以来、蓄積されてきた地域コミュニティや社会規範、祭礼、商慣行、産業等は連綿と受け継がれてきた。本著は、土地、地域、コミュニティに根ざした住民の「まちづくり」の変遷を初めて体系的に記録した一冊である。

※センター窓口でも販売しています。

景観・まちづくり大学2009のご案内

会場：京都市景観まちづくりセンター他 時間 14:00～16:00

●まちづくり実践塾

- 1/9 (土) 地域で住み続けられるマンションとは
講師：谷口浩司氏 (京都マンション管理評価機構代表・他)
- 2/13 (土) コミュニケーションのきっかけとしてのみどりの可能性
講師：てらうち桂子氏 (樹木医・他)
※京都市緑化協会協働企画
- 3/6 (土) 人とまちとコトをつなぐメディアの活用方法
講師：太田航平氏 (NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone 代表理事)

●京のまちづくり史セミナー

- 1/23 (土) 京の景観講座①ー水脈都市・京都ー
講師：小野芳朗氏 (京都工芸繊維大学教授)
- 2/27 (土) 京の景観講座②ー近代期のまちづくりと景観形成を考えるー
講師：石田潤一郎氏 (京都工芸繊維大学教授)
- 3/13 (土) 京の景観講座③ー京都の景観政策と景観デザインのプロセスー
講師：山崎正史氏 (立命館大学教授)

●京町家再生セミナー

- 2/20 (土) 木に自然塗料を塗ってみよう (予定)
※●小学生以下は保護者同伴
※お申込み、お問い合わせはセンターまで



マチ右衛門のつぶやき

12月に入って急に寒くなりましたね。我が家もコタツを出すやらストーブを出すやらで、一気に冬支度となりました。

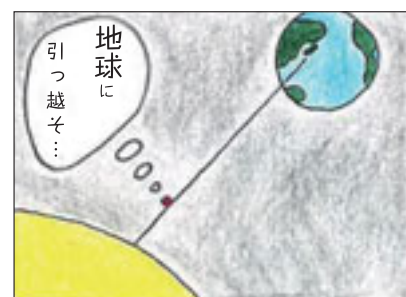
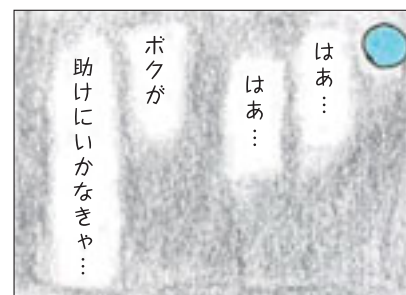
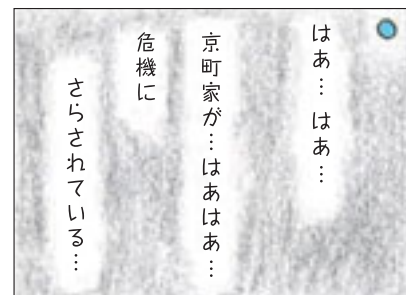
先日、観光ビークの京都を離れ、高速道路の休日乗り放題を利用して、日帰りで奥飛騨に紅葉を見に行きました。高速道路を下りて、快適に国道を走っていると突然目の前に、おなじみの白い軽トラックが…。仕方なく後ろをついて走

っていると、追い越し車線が…。気合いを入れて追い越しをかけた途端、警官が旗を持って現れ、1万数千円の罰金となりました。こんなことなら温泉宿にでも泊まれば良かったと後悔しましたが、時すでに遅でした。しかし、奥飛騨の紅葉はとても綺麗でした。(M.H.)

観光地周辺の交通対策は、共通の課題ですね。安全運転を心がけてください。(編集担当)

京兎物語

ペンネーム ひこ



センター活動拠点のご案内

京都市景観・まちづくりセンター

〒600-8127 京都市下京区西木屋町通上ノ口上る梅湊町83番地の1 (河原町五条下る東側)

「ひと・まち交流館 京都」地下1階

TEL 075-354-8701

FAX 075-354-8704

e-mail: machi.info@hitomachi-kyoto.jp

HP: http://machi.hitomachi-kyoto.jp

●開館日 (相談の受付等)

9:00～21:30 (月曜日～土曜日)

9:00～17:00 (日曜日・祝日)

●休館日

毎月第3火曜日 (国民の祝日に当たるときは翌日)

年末年始 (12月29日～1月4日)

なお、センターへのお越しの際は公共交通機関をご利用ください。



新ファンド寄付付き商品

